

スロヴァキア共和国大統領ミハル・コヴァーチの講演
市民社会を形成中の新生国家のパースペクティヴから見た中欧

笹川平和財団、東京、日本－1998年2月

ご列席のみなさま

本日のこの祝宴の夕べを、日本の社会・政界・経済界の重鎮でいらっしゃるみなさま方とともに過ごせますことは、私の大きな喜びとするところです。

私が日出ずる国－日本にまいりましたのは、輝かしい全世界的なイベントである長野での冬季オリンピックに列席するためです。また、私はこの貴重なフォーラムで講演するようという笹川平和財団のご招待も、喜んでお受けしました。笹川洋平氏とは、氏がスロヴァキア共和国の首都ブラチスラヴァを訪問されたおりに、スロヴァキアにおける平和財団の重要な活動について、また市民社会や民主主義、そしてグローバリゼーション（国際化）の問題について、お話を交わす機会を持ちました。

喜ばしいことに、日本とスロヴァキア共和国のあいだの交流は、近年めだって活発になっています。私の念頭にありますのは、政治と経済面での協力とともに、文化と教育の分野における多くの交流と交換です。両国の地理的な遠さは、現代コミュニケーションとグローバリゼーションの時代にあっては、すでに障害ではありません。本日の講演のなかで、私が注目したいと考えているのは、ヨーロッパにおける市民と国家の関係というひじょうに現実的なテーマで、欧州統合に際しての市民社会の課題に焦点を絞りたいと思っています。

3週間前に私は、レヴォチャという由緒あるスロヴァキアの町で、中欧と南東欧の10カ国の大統領を迎えました。私たちが集まりましたのは、ラウンドテーブルを囲むインフォーマルな討論のなかで、私が提案した「統合されたヨーロッパの希望としての市民社会」というテーマで、私たちの国々の社会の現実的な問題を考えるためです。一人一人の国家元首がこのテーマにたいして取った姿勢は、彼らの国の市民社会が置かれている状況を、的確に反映しています。選ばれたテーマとラウンドテーブルでの討論が示したのは、変貌しつつある中欧と東欧諸国の社会が置かれている条件がそれぞれ異なっていて、たいはいはひじょうに複雑であるにもかかわらず、市民社会の良質で全面的な発展こそが、それらの諸国が前進するための必須条件であるという事実です。私たち全員が結論で一致しましたように、繁栄する民主的で協力しあう統一欧州のなかでの私たちの共通の未来は、主権を持った自覚的な市民が存在しなければ達成できません。

ヨーロッパ統合は、中欧地域の諸民族のあいだの関係を長期にわたって蝕（じく）んできたひじょうに根深い歴史的な敵意と怨恨を、決定的に克服する手助けになるはずですが、

近代的な市民社会がヨーロッパで誕生しはじめたのは、臣民が市民に変わった時でした。この変化をフランス革命は、人権と公民権の宣言によって布告しました。ヨーロッパで数世紀にわたって建設され強化されてきた包括的で権威主義的な国家にたいして、人権宣言は日の当たる場所をすばい勝ち取っていかねばなりません。中欧においては民族解放運動もこの動きの一部となりました。

つまり中欧は今日にいたるまでずっと、多くの民族の祖国なのです。一部の民族がある時期に中欧を去ったり、完全に滅びてしまったことがあったにせよ、そうでした。しかしこの多民族空間は16世紀以後しだいに、3つの強大な帝国によって支配され、これらの帝国は20世紀初頭においてもなお中欧を支配していました。大陸の中央部ではハプスブルク王朝のもとにあったオーストリア・ハンガリーが、西からは復活したドイツ帝国が、東からはロシア帝国がその影響力を行使していました。独立していなかったヨーロッパの諸民族を解放しようとする動きが増大しつつあった時期に、これらの帝国は小民族にたいする支配を維持しようとしたが、第一次世界大戦の結果が示したように、ほとんど成功しませんでした。戦争でハプスブルク帝国は完全に解体し、ロシアとドイツはひじょうに弱体化したので、中欧に新生国家群が誕生するのを妨げることができませんでした。

中欧では民族解放の動きを、市民社会の形成と切り離すわけにはいきませんでした。ヨーロッパのそのほかの地域と同じように中欧地域でも、自由に選出された議会と明確な憲法原則に依拠しない統治形態である絶対主義が崩壊した後で、19世紀にしだいに市民社会が形成されはじめました。法治国家の成立は、市民社会のための前提条件もつくり出しましたが、中欧において市民社会の形成が不完全なものであったのは、権威主義的でお役所主義的な伝統のなごりのためでした。またすでに指摘しましたように、フランスやイギリスやそのほかの西欧諸国のような民主主義国家に、政治的に後れを取っていた大帝国内での小民族抑圧のためでもありました。こうした帝国の弱体化、とくにハプスブルク帝国の崩壊によってようやく、第一次世界大戦後に大きな民主主義がもたらされ、それによって市民社会が成長するための場も大きくなりました。とくにそれが言えるのは1918年に成立したチェコスロヴァキアで、この国は民主主義的な政治システムを、ほぼ両大戦間期を通じて維持しました。

第二次世界大戦におけるファシズムの敗北によって、西欧は全体主義から解放され、一時的に抑圧されていた西欧の市民社会は、1950年代から復活プロセスを体験しました。個々の西欧諸国では20世紀後半に立憲主義の原則が強化され、法治国家の民主的制度が発展し安定しました。権力分割の厳密化によって分権化も進行し、本来の西欧的市民社会の復活プロセスは新たな発展段階に移行しはじめました。

中欧の一部と東欧は、市民国家と市民社会の復活プロセスから鉄のカーテンによって切り離されていましたが、このカーテンは1989年の共産主義ブロックの崩壊によって、完全に取り払われました。そうなったのはイニシアティブをとった市民大衆のおかげで、彼らが通りと広場を埋めつくして、大衆的抗議の大きな波のなかで全体主義体制を拒否し打倒しました。その過程で蘇った市民社会が姿を現しました。それらはたとえばポーランドでは「連帯」、チェコ共和国では「市民フォーラム」、スロヴァキア共和国では「暴力に反対する公衆」のような象徴的な名前がつけられました。出発点となるようなさまざまな市民のイニシアティブと活動が発揮されて、結局それぞれの国の全体主義体制の崩壊を引き起こしました。ポーランドでは円卓会議の設置がそうでしたし、東ドイツではベルリンの壁の崩壊、ハンガリーでは野党の選挙参加が勝ち取られたこと、あるいはチェコスロヴァキアでは、共産党の指導的役割原則の廃止と国民和解内閣の成立がそうでした。

共産主義体制の崩壊とソビエトブロックの消滅によって、民族解放運動が達成された時と同様に、民主主義的政治体制と市民社会の復活と発展が可能になりました。真の市民社

会は、民族的境界や国境のなかに閉じ込めることはできません。その本質からして市民社会は国境を越え、平等で自由な市民のボーダーレスな社会をつくり出すことをめざしています。つまり公民権と人権は、地方の当局や国家や実定法に由来しているのではなくて、人間の普遍的な自然権に由来しているのです。第二次世界大戦後のヨーロッパの社会体制の人道的な出発点を表現している世界人権宣言も（それが採択されてから今年の12月で50年を迎えますが）、まさに人間の自然権に依拠しています。

しかし強調したいのは、私の国で半世紀にわたって自然な民主主義的發展が妨げられた後でも、私たちが1989年以後にゼロから出発したわけではないこと、わが国の言い方によれば「緑の草地」から始めたわけではないことです。社会の歴史的な記憶のなかには、共産主義時代に数十年も私たちが暮らしてきたような統治や社会制度とは別のあり方への思い出が、ともかく保たれていました。この記憶はチェコスロヴァキアでは、すでに1968年のドゥプチェクのプラハの春の時期に蘇りました。ちなみにこの改革運動は、かなりの程度スロヴァキアからの促しによって起こりました。

市民社会という概念は古いヨーロッパ起源を持っているにもかかわらず、それが実現されはじめたのは現代ヨーロッパになってからです。多くの専門家に言わせると、市民社会理念は20世紀末の指導理念になることができます。

それは相互に交わりあう2つの現実であり、相互に影響しあう2つのプロセスです。古いヨーロッパの市民社会理念は、第二次世界大戦後の欧州統合プロセスのインスピレーションの源になりました。ヨーロッパの諸民族と国家の統合プロセスはしだいに実現され、民族と国家を越えた新たなヨーロッパ市民社会の展開にいたりしました。

ヨーロッパ市民社会の特徴となっているのは、ヨーロッパ市民、諸地域のヨーロッパ、地方自治と地域自治のヨーロッパ、権限が分権化されたヨーロッパを生み出している助成原理、さらに市民のイニシアティブと市民の自助の広範なシステムです。非政府組織（NGO）の広い網の目は、社会的に重要な目的を達成することを基盤にして機能しています。つまり自助やチャリティー、ささやかな仕事、団体活動、道義的プレッシャー、人権と公民権の行使と保護、モニター活動、さらに人権侵害と乱用の摘発と弾劾といった非政治的な手段による政治的目的の達成を基盤にして機能しているのです。

ヨーロッパの西側に、発展して安定した市民社会が存在していることは、ヨーロッパ大陸のもう一方である中欧と東欧において、50年遅れて市民社会の基盤を築くことをはっきりとした形で助けていましたし、今も助けています。

ヨーロッパの市民社会は、古い権威主義的な国家にたいする抵抗のあらわれとして生まれました。市民社会は、古い権威主義的な国家が近代的な民主主義国家にしだいに変貌していく際に、みずから積極的に存在するための場をつくり出し、勝ち取るプロセスのなかで形成されました。今日では市民社会は、近代的な民主主義国家が欧州連合（EU）を頂点とするヨーロッパの超民族制度にしだいに統合されていくプロセスのなかで、安定したものになっています。

国家とその制度にたいする市民社会の従属的な地位が、今日でもあいかわらず続いているのは、全体主義から民主主義への移行プロセスが完了していないところ、すなわち指導者タイプや家父長タイプの権威主義的な国家のなごりが強い国々です。そうした国々では市民社会の萌芽はあいかわらず未熟で、市民社会の制度は大きく発展するためのじゅうぶ

んな場を持っていません。そうした国では、地方自治機関と地域自治機関における権力の垂直的分権化が、じゅうぶんに進行し機能していませんし、国家がすべての市民制度と自助活動にたいして統制と管理の権限を要求していて、それがNGOの機能の発展にブレーキをかけています。

こうした場合の国家の民主的指導部の課題は、政治権力の垂直的分権化だけでなく、水平的分権化のプロセスも最大限の促進することです。そして新旧のNGOのイニシアティブと組織にたいして可能性をひらき、平等なチャンスを提供するような政治メカニズムを創設するプロセスを最大限に促進することです。

チェコスロヴァキアでもそのほかの中欧諸国と同じく、複数制民主主義と政党の自由活動システム、議会と地方自治機関への自由選挙が、1989年以後ひじょうに急速に回復しました。つまり複数制民主主義は、市民社会のすべての構成要素が自由に発展し活動するための前提条件であり基盤なのです。いっぼうよく発達した機能する市民社会は、民主的政治体制や複数制民主主義の強化を助けます。

スロヴァキア共和国は1993年1月1日に独立した際に、チェコ共和国と同じように、独立したNGOや団体、連盟や基金の広い網の目を引き継ぎましたが、それらは事実上、社会生活のすべての分野においてみずからの活動を展開しています。NGOの活動や自由な出版物、電子メディアにおいて形成中の双方向システム、さらには政党の活動のおかげで、1989年の大きな社会変動から9年たった今でも、スロヴァキア社会は社会活動について大きな関心を示しています。さらに政界での展開を注意深くフォローしています。たとえば定期的な世論調査がそのことを証言しています。

ご列席のみなさま

ヨーロッパでいちばん若い国家のひとつである民主的なスロヴァキア共和国の初代大統領の職務を5年間務めてきた間に、私が認識いたしましたのは、民主主義を成功裏に安定させて、ヨーロッパ統合を果たすためには、国家や国家機関と市民社会のあいだにバランスがつくり出されなければならないことです。その関係は、両者のあいだの対抗関係という古典的な立場から、相互補完、相互に有益な共存という民主主義的立場に移行しなければなりません。国家は、市民社会がじゅうぶんに機能するための条件をつくり出さねばならず、そのためにみずからの多くの「主権的」権限を放棄しなければなりません。市民社会の制度は、国家がうまく機能することができない場面で機能しており、国家が無力だったりむしろ有害だったりするところで、その助言機能を代行しています。

つまり国家と市民社会のあいだにこうした安定したバランスをつくり出すことは、中欧と東欧諸国における民主化プロセスを完了させるための、基本的な前提条件なのです。この点で忘れてならないのは、市民社会のひとつの重要な次元です。「市民的」という概念は、先行する「前市民的」状態や自然状態とは異なって、そのはじまりから「文化的」「文明的」「教養のある」「謙虚な」ということも意味していますが、このことは市民法典や公民権も表現しています。

つまり市民社会とは、なによりも文明的で謙虚な人びとの社会、高い市民文化を持った人びとの社会であり、彼らは市民文化をみずからの発展した市民社会から政界へも、市民生活から政治生活へも伝播しています。そこでの彼らの市民文化は、政治活動のすべての

領域において、政党の内部や政党間、議会や政府の内部、大統領と政府首脳、議会の首脳とそのほかの憲政活動家たちのあいだの政治関係のすべての領域において現れている政治文化の規範なのです。

全面的に発展した市民社会を真摯に断固としてめざすことは、私たちの共通目標であり、みずからの将来にたいする私たちの義務です。こうした意図が成功裏に遂行されることを私は信じています。

ご静聴に感謝いたします。

〔長興 進 訳〕